岡山県立博物館だより

42号
3月31日
1994

新収蔵品紹介

百万塔　および陀羅尼経

奈良時代
総高21.0cm　　底径10.5cm

「宝亀元年（770）　四月
八年乱平　乃発弘願　令造三重小塔一百万基　高各四寸五分　基径三寸五分　露盤之下各置根本、慈心、相輪、六度等陀羅尼　至是功畢　分置諸寺」（『続日本紀』）

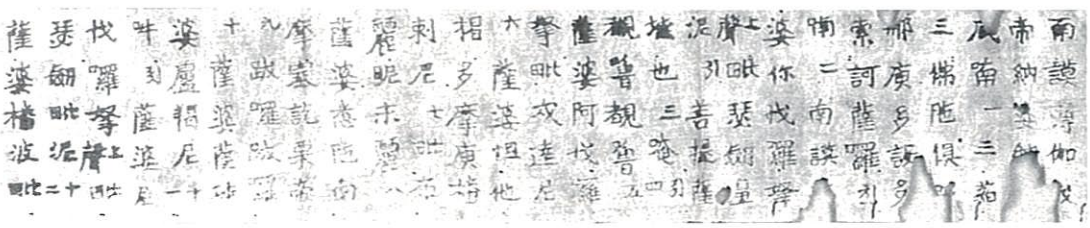
天平宝字八年（764）の恵美押勝の乱の後，称徳天皇は鎮護国家と犠牲者の冥福を祈って，百万基の木製の小塔を作らせた。そして各々に陀羅尼（仏教で用いる一種の呪文）を刷ったものを納め，宝亀元年（770），法隆寺，大安寺，東大寺など10の大寺に各々10万基ずつを分置した。これが百万塔である。

現在，百万塔のほとんどが失われ，法隆寺にのみ約4万6千基足らず，陀羅尼は断片も含めて5千点余りが伝えられているが，これらのうち同寺の大宝蔵殿に収められていた百基は重要文化財に指定されている。

百万塔には，三重，七重，十三重の3種があるが，大部分は三重の小塔である。相輪と塔身の部分に分けて轆轤挽きで形成したのち表面に白土を塗って仕上げている。塔身上部の相輪をのせる部分には穴を穿ち，ここに陀羅尼を収めた。この陀羅尼は，年紀の明らかな印刷物としては，世界最古のものである。麻（又は楮）の紙に，銅版（又は木版）で刷っている。

このたび本館が収蔵することになった百万塔は，明治41年（1908）に法隆寺に対する施納金への謝礼として，正式に門外に出されたもので，陀羅尼も完備した逸品である。仏教による鎮護国家をめざした奈良朝の息吹を伝える百万塔が，本館における数少ない古代資料のひとつにつけ加えられた。

ちなみに，岡山県とゆかりの深い和気清麻呂は，恵美押勝の乱鎮圧に功を立て，称徳天皇のもとで破格の出世をしている。



平成５年度事業報告

特別展

なりわいの知恵
－とる・つくる・たべる－

平成５．10．23～11．23

本館では，平成元年度に「技術と暮らし」と題する特別展を開催し，鉄と社会，織物技術の発達，焼物の発達と生活，技術の断面－わる・ひく・けずる・とぐ－などのテーマで，我々の祖先が豊かな暮らしを求めて積み重ねてきた努力の足跡をたどったことがある。本年度の特別展は，これらをさらに進め，我々の祖先の日々の暮らしを支えたもっとも基本的な，生きるための技術発達の歴史に目を向けようと企画したものである。我々の祖先は日本列島の自然環境の中で，生活の糧を得るため，日夜さまざまな知恵をしぼって生き抜いてきた。その蓄積の上に，今の我々の生活がある。このような先人たちの生活の知恵に目を向けることは，現代の我々の生活を見つめなおすことであり，これを具体的に展示構成して紹介することは，歴史博物館としての本館の使命であろうと考えたのである。展示は採集・狩猟，漁業，製塩，農業の4つのテーマをとり，これに調理用具の歴史を加えて構成した。

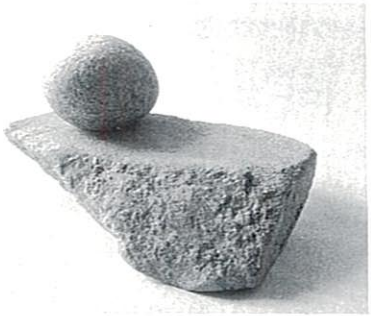
採集・狩猟、漁業

生きるための知恵＝技術は自然を細やかに観察し，動植物の生態を観察するところに初めて成立し得たものであった。特に，狩猟・採集，漁業においてはそうであった。犬と弓矢を使用する合理的，基本的狩猟法や銛・釣り針・網など基本的な漁具は縄文時代の終わりまでにはすでにできあがっている。以後はこの形態を踏襲しながらの技術改良と応用，規模の拡大であったといえる。

製　塩

海に囲まれ，岩塩に頼れなかった日本列島の人々は海水を煮詰めることで，必要な塩を獲得してきた。現在のイオン交換樹脂膜法以前の製塩は，ひとえに，如何にして濃い塩水（鹹水）を確保するかにかかっていた。ここでは，土器製塩から塩田式製塩（揚浜式・入浜式）への技術革新の過程や塩田式製塩の様子を用具の変遷を通して紹介した。

製塩の図　伊勢新名所歌合絵巻（模本）東京国立博物館蔵



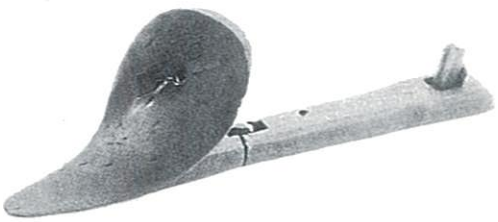
石皿とすり石

山陽町
教育委員会蔵

農　業

大陸から伝播した米作りの技術や知識は，狩猟・採集を基盤とする社会を変革し，以後日本列島には，農耕社会が成立，発展する。展覧会では，坂出市出土の最古の犂をはじめ，各時代の農耕・収穫・調整用具を展示し，用具の変遷の中に見られる先人の知恵を探った。併せて，耕地拡大のための，土木技術についても紹介した。このほか，特に，古代末期ごろ出現する「擂鉢」という器形に注目して，擂鉢の出現の意味を考えるなど，私たちの身近にあって，意外に知られていない問題についても展示した。

展覧会期間中の11月６日（土）には，国立歴史民俗博物館副館長佐原眞氏による「石から鉄へ」と題する講演会を開催，内容豊かで，わかりやすい氏のお話は好評であった。



犂　坂出市下川津遺跡出土　香川県教育委員会蔵

特別展記念講演会より

企画展

岡山の絵馬Ⅱ

平成6．1．27～3．6

昨年度企画展「岡山の絵馬Ⅰ」では，生業や風俗を主題とした絵馬を特集しましたが，続く本年度の「岡山の絵馬Ⅱ」では，「絵師」といわれる人々の描いた美術的指向の強い絵馬を御覧いただきました。

「絵馬」とは，神社や仏閣に奉納された扁額の総称です。

人々の生活が神や仏と密接に関わりあっていた時代には，老若男女がそれぞれに願いや感謝の気持ちをいだいて寺社に参詣し，絵馬を奉納していたことと思います。それゆえに絵馬はそれぞれの時代の生活や社会を如実に反映しています。

江戸時代も後半になると中央の絵師が地方を歩いたり，地方の絵師が中央に出て一家を成したりという例がしばしば見られるようになります。また各地で絵筆をふるい弟子を育成する絵師も増えて，庶民の間にも芸術や芸能文化への関心がたかまってきます。

様々の人々が参集する寺社に絵馬を掲げることは，絵師にとっては自らの画技を世間に示す絶好の機会でもあり，またこれを観る人にとっても直に美術作品に接することのできる数少ない機会でありました。それだけに力作といえるものも多いようです。

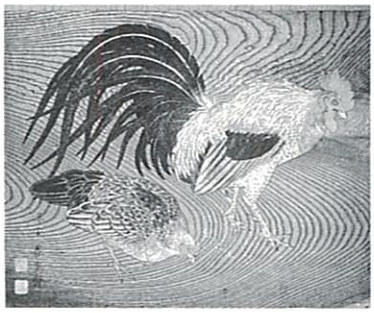
今回展示の，狩野義信筆「曳馬図」，古市金峨筆「楊貴妃図」などは，彼らの数多い作品の中でも代表作にあげられるものです。また京都の画壇で活躍した岡本豊彦が20代前期に制作した絵馬や，近現代の日本画壇の巨匠小野竹喬が，ヨーロッパ旅行帰国後に描いた早期の絵馬などのように，画人研究に欠かせない資料もありました。

昨年，本年の2回の絵馬展を機に，庶民の暮らしや文化を語る資料として，絵馬が再認識され，今後さらに調査が進むことが期待されます。

主な展示資料

繋馬図　池田綱政　宝永4年(1707)岡山市・吉備津彦神社
諫太鼓に鶏図　池田継政　延享2年(1745)　岡山市・吉備津彦神社

絵馬　繋馬図
岡山市
今村宮蔵



絵馬　双鶏図
倉敷市
本荘八幡宮蔵

神器図　池田継政　宝暦7年(1757)　岡山市・住吉神社
軍配図　池田継政　宝暦6年(1756)岡山市・吉備津彦神社
繋馬図　池田継政　明和2年(1765)　玉野市・八浜八幡宮
繋馬図　長谷川常時　享保11年(1726)　岡山市・吉備津彦神社
繋馬図　長谷川幸芳　天明2年(1782)　岡山市・吉備津彦神社
繋馬図　土佐光成　宝永元年(1704)　岡山市・今村宮
繋馬図　蝸牛　宝暦12年(1762)　倉敷市・阿智神社
鳳凰図・麒麟図(1対)　三村常和斎　元禄9年(1696)　成羽町・大元八幡神社
馬図　黒田綾山　寛政10年(1798)　倉敷市・足高神社
桐に鳳凰図　岡本豊彦　寛政5年(1793)　邑久町・若宮八幡宮
唐美人図　岡本豊彦　寛政5年(1793)　邑久町・若宮八幡宮
干将莫邪図(岡山県指定重要文化財)　田代忠国　寛政4年(1792)　邑久町・若宮八幡宮
松に白鷹図　筆者不明　安永2年(1773)　玉野市・八浜八幡宮
小松引き図　岡　岷山　寛政4年(1792)　玉野市・八浜八幡宮
羅浮の夢図　多田文暝　文政2年(1819)　玉野市・八浜八幡宮
楊貴妃の図　古市金峨　江戸時代　倉敷市・蓮台寺
群仙図2面(1対)　南暝　文政10年(1827)　倉敷市・阿智神社
義家観雁図　仙嶺　明和3年(1766)　総社市・備中国総社
猿駒曳図　洞玉　寛政7年(1795)　総社市・備中国総社
虎図　岸駒　文化元年(1804)　総社市・備中国総社
三武者図　石川晃山　嘉永2年(1849)総社市・備中国総社
林和靖図　大原呑舟　天保4年(1833)総社市・備中国総社
仙女太真王夫人図　大原呑舟　天保5年(1834)　岡山市・吉備津神社
貴人乗馬図　小野雲鵬　天保6年(1835)　岡山市・吉備津神社
中国戦国志の図　小野雲鵬　天保2年(1831)船穂町・船穂神社
騎馬武者図　淵上旭江　江戸時代　牛窓町・牛窓神社
仙人図　淵上旭江　天明5年(1785)　牛窓町・牛窓神社
曳馬図　狩野義信　安政4年(1857)　備前市・大内神社
武者一騎討ちの図　狩野永朝　明治8年(1875)備前市・大内神社
義経八艘跳の図　狩野永朝　明治時代初期　岡山市・安仁神社
静御前図　武田五峰　嘉永6年(1853)　牛窓町・牛窓神社
双鶏図　森寛斎　文久元年(1861)　倉敷市・本荘八幡宮
盛綱一番乗りの図　三好雲仙　明治時代初期　倉敷市・両児神社
武者図　津田英川　文久3年(1863)　備前市・宇佐八幡宮
雄鶏図　長谷川勝巌　明治7年(1874)　岡山市・大林寺
「はぐくまるる朝」　小野竹喬　大正11年(1922)　笠岡市・笠神社

テーマ展

金　山　寺

平成５．４．15～５．16

岡山市金山寺にある銘金山金山寺は，備前第一の天台宗の古刹で，奈良時代に備前48ケ寺を開いた報恩大師がその根本道場として天平勝宝元年（749）に創建したと伝えられる。平安時代末期には，備中・吉備津宮社家賀陽氏の出身で中国から臨済宗を伝えた栄西も，しばらく当寺に滞在して伽藍の整備を行ったといわれる。その縁からか，鎌倉時代になると，将軍家の祈願所にあてられ，室町時代には将軍家のほか備前守護の祈願所にもあてられていた。戦国時代になって，日蓮宗に帰依していた御津郡金川城主松田氏から日蓮宗への改宗を強要され，これを拒否したため焼き討ちされたといい，寺勢は衰え荒廃したが，その後伯耆・大山寺から来山した円智（豪円僧正）が岡山城主宇喜多直家の援助を得て伽藍を再建し，復興にあたった。

江戸時代には，徳川将軍家の祈願所にあてられており，歴代将軍から直接朱印状をもって寺領（186石余）をあたえられていた，いわゆる御朱印寺として岡山藩の支配から独立していた寺院であり，多くの末寺を有し，岡山藩主をはじめ広く民衆の信仰をあつめ，備前第一の天台宗寺院として栄えた。

明治維新後は寺領を失い，寺勢の衰退を余儀なくされたが，今も広大な境内にそびえる伽藍に昔日の繁栄ぶりを伝えている。

こうした由緒をもつ金山寺には，天正３年（1575）に再建された本堂（国指定重要文化財），護摩堂（岡山県指定重要文化財），三重塔(同)，山門(岡山市指定重要文化財）のほか，平安時代末期から室町時代に至る古文書（国指定重要文化財），平安時代の造立になる木造阿弥陀如来坐像（岡山県指定重要文化財），栄西が中国から請来したと伝える五鈷杵・五鈷鈴(同)をはじめ，貴重な文化財が多い。

この展覧会では，建造物以外の指定文化財を中心に，金山寺伝来の絵画，書跡，工芸品のなかから主なものを選んで展示し，金山寺の歴史と将軍家祈願所としての役割，岡山藩主池田氏の信仰などについて紹介した。出品資料の中で県指定重要文化財の阿弥陀如来坐像は痛みが激しいため近年修理されたが，修理後初公開できたのも意義深いことであった。

主な展示資料

木造阿弥陀如来坐像 1軀 平安時代 岡山県指定重要文化財
五鈷杵・五鈷鈴　各１口　鎌倉時代　〃
絹本著色両界曼陀羅　２幅　室町時代
〃　不動二童子像　１幅　〃
〃　十二天像　12幅　〃
〃　弁才天像　１幅　〃

観音堂扁額

絹本著色釈迦十六善神像　１幅　室町時代
〃　十六羅漢像　１幅　〃
〃　揚柳観音像　１幅　江戸時代　岡山藩主池田綱政筆
〃　行叡居士像　１幅　〃　岡山藩主池田継政筆
〃　薬師如来像　１幅　〃　〃
〃　徳川家康像　１幅　〃
〃　徳川家光像　１幅　〃　岡山藩主池田継政筆
〃　池田輝政像　１幅　〃
〃　池田継政像　１幅　〃　岡山藩主池田継政自筆
書跡「寿」「福」対幅　２幅　江戸時代　岡山藩主池田治政筆
金山寺文書「関東下知状」　１通　鎌倉時代　国指定重要文化財
〃　「六波羅下知状」　１通　〃　〃
〃　「金山観音寺縁起」１巻　室町時代　〃
〃　「羽柴秀吉禁制」　１通　安土桃山時代　〃
〃　「備前四十八ケ寺領目録」　１通　〃　〃
病草子　１巻　室町時代

県重文
木造
阿弥陀如来
坐像

テーマ展

渡来人と須恵器の成立

平成5．7．29～8．29

私たちが日頃使っている焼物ルーツをさぐれば須恵器に始まる。わが国に須恵器の製作技術をもたらしたのは5世紀前半に朝鮮半島から海を渡ってきた渡来人である。彼等は大阪府堺市大庭寺遺跡をはじめとして，泉州地域にわが国最初の大規模な須恵器窯を築いた。吉備では5世紀に入ると岡山市高塚遺跡や総社市窪木・薬師遺跡などで，朝鮮半島から渡来した人々かあるいはまた，渡来人の強い影響のもとで営まれたと推察されるカマド付の竪穴住居跡が発見されている。その上，こうした遺跡をはじめとして，吉備の南部では陶質土器や軟質土器と共に在地産の初期須恵器が出土している。初期須恵器の生産が渡来人の影響のもとで開始された様子がうかがえる。渡来人はまた，新しい鉄器製作技術や馬具や玉などの装身具など，高度な技術を持ち込み，旧来の生活様式に変革をもたらせたのである。この展覧会では，吉備地域における遺跡出土の渡来系遺物を中心に展示し，吉備と渡来人のかかわりを探ろうとするものであった。展示品の中には，わが国の初期須恵器の成立をみるうえで欠かせない大庭寺遺跡の出土遺物や四国地方最古の窯跡である高松市三郎池西岸窯や豊中町宮山窯などの初期須恵器もあり，入館者の関心をあつめた。

展示風景

主な展示資料

陶質土器　伝大邱出土　岡山県立博物館
初期須恵器大甕ほか　堺市大庭寺遺跡　大阪府文化財協会
初期須恵器器台ほか　倉敷市菅生小学校裏山遺跡
岡山県古代吉備文化財センター
陶質土器甕　笠岡市七ツ塚出土　笠岡市教育委員会
鍛冶金具一括　津山市長畝山古墳　津山市教育委員会
須恵器成形土師器甕　総社市法蓮37号墳　総社市教育委員会
金層ガラス玉　大佐町円通寺1号墳　大佐町教育委員会

博物館講座

毎年好評を得ている歴史講座「岡山県の歴史と文化」を下記の内容により開講した。応募者は，募集人員（60名）を越える111名にのぼり，抽選により受講者を決定した。

現地見学会では，岡山市足守の葦守八幡宮・旧侍屋敷・近水園・足守文庫・大光寺と鼓神社・日応寺を訪ね，特に日応寺では不動明王立像・毘沙門天立像（国指定重要文化財）などの貴重な文化財を拝観した。

学習内容と日程

テーマ	講師	開講日
備中松山城の築城	総括学芸員　加原耕作	5／28（金）
描かれた来世	学芸員　中田利枝子	
岡山の絵馬 －生業・風俗絵馬の世界－	学芸員　田村啓介	6／4（金）
水墨画の世界	学芸員　守安　收	
現地見学（岡山市足守・日応寺）	本館職員	6／11（金）
岡山の獅子と狛犬Ⅱ	主任　八田　貢	6／18（金）
岡山県の初期須恵器について	岡山県古代吉備文化財センター文化財保護主査　中野雅美	
瀬戸内の商品流通 －海産物を中心に－	学芸課長　竹林栄一	6／25（金）
吉備の古墳	副館長　河本　清	

現地見学（葦守八幡宮）

平成５年度購入資料

○平城京跡出土　木簡〔複製〕　２点　　原品：奈良時代
○法然上人七ケ条制法〔複製〕　１巻　　原品：鎌倉時代
○法然上人絵伝　〔複製〕　１巻　　原品：鎌倉時代
○百万塔および陀羅尼経　１基１巻　　奈良時代
○信楽焼　壺　１点　　室町時代後期
○太刀　銘　横山上野大掾藤原祐定　備州長船住人
　１口　　江戸時代前期
○体験学習用教材　備中神楽面　３面
○体験学習用教材　魔鏡　１点

平成５年度寄贈資料

○総社市宮山遺跡出土資料　特殊器台ほか　一括
　東京都　文化庁
○浮世絵・淵上旭江筆絵画・文書・書籍ほか　一括
　倉敷市　山本繁子
○鐔　20枚　岡山市　伊原木辰子
○角火鉢２点・炭籠・柱時計・ラジオ　５点　岡山市　金子宏
○蛸漁用　ケタ・ドウヅキ　２点　倉敷市　義藤忠昭
○除草機２点・こたつ　３点　岡山市　土師野節乃
○備前市伊里周辺の漁具　一括　備前市伊里漁業協同組合
　（敬称略）

以上，貴重な資料の寄贈を受けました。永く大切に保管するとともに，本館の展示・研究資料として有効に活用させていただきます。ここに御寄贈くださいました方々のご芳名を記入し，厚くお礼申しあげます。

平成６年度事業のお知らせ

○特別展「平安から鎌倉へ」（仮称）

平成６年10月～11月

平安時代から鎌倉時代にかけての時代は，貴族からその従者（侍）であった武士へ政権が移行する大きな変革の時代であった。平氏政権を経て本格的な武士政権である鎌倉幕府が誕生すると，以後，江戸時代の終わりまで，武士による政治の時代，封建社会が700年近くも続いたのである。

この展覧会は，古代から中世封建社会への移行期の歴史的変化を取りあげる。貴族政権が衰退する過程で，どのような歴史的事象が展開されたのか，また武士が台頭する契機となった合戦の様子や新しい時代を担う武士社会の実態などについて，各種絵巻物や古文書・出土資料などによって具体的に展示してみたい。また，この時代に，次第に生活の基盤を確立してくる庶民の生活や鎌倉新仏教にみられる新たな精神生活の形にも注目してみたい。

○テーマ展「美作の古墳」

平成６年５月～６月

美作地方で近年発掘された5世紀から6世紀の木棺直葬墳とその出土品を中心に，この時期における民衆の成長と社会の変革を紹介する。

○テーマ展「子供の四季と遊び」

平成６年７月～９月

わが国では，各家庭や地域社会で展開された年中行事において，子供の無事な成長を祈る様々な行事が実施されてきた。しかし，戦後の社会の急速な変化の中で，子供をとりまく周囲の環境も大きく変わり，そうした行事の本来的な姿は失われつつある。特に，昭和30年代後半以降の子供の遊びは大きく変わり，遊びの室内化および小集団化の傾向が顕著となった。そうした屋外での集団遊びの衰退により，長く伝承されてきた遊びも忘れ去られようとしている。

この展覧会では，岡山県内の四季おりおりの子供に関わる各種の年中行事と自由奔放な子供の遊びを収集し，時代の変遷の中で消失しつつある伝統的な子供の世界を紹介する。

○企画展「港町牛窓」

平成７年２月～３月

牛窓は古くからさかえた港町である。牛窓湾をとりまく丘陵や島にある５基の前方後円墳はすでに古墳時代から牛窓が内海の要衝であったことを物語っており，古歌にも内海を行きかう船が牛窓に停泊していたことを物語るものが少なくない。また，室町時代に牛窓の豪族石原氏が対明貿易に携わっていたことは中国側の資料によって知られるが，この石原氏は日蓮宗に帰依し，本蓮寺を創設したことでも著名である。江戸時代の牛窓は，岡山藩最大の港として商業活動や造船が盛んで，将軍の代替わりごとに訪れた朝鮮通信使の寄港地ともなっていた。

この展覧会では，本蓮寺に残る日蓮宗関係資料や朝鮮通信使資料，町人文化を物語る各種資料，木造船建造関係資料などを展示し，港町牛窓の文化の一端を紹介する。

○博物館講座「岡山県の歴史と文化」

平成６年６．３～７．１
各金曜日の5日間

当だより40号で紹介しました新収蔵品の「亀山焼　壺」について，ある研究者の方から讃岐（現香川県）で焼かれた十瓶山窯産の須恵器壺ではないかというご教示をいただき，調査しましたところ，ご教示のとおり平安時代後期の十瓶山窯産の須恵器壺でした。ご教示に対し御礼申し上げます。従来，この種の壺は亀山焼とされていましたが，昭和40年代以後十瓶山の窯跡が発掘調査され，両者の相違が明らかになってきたものです。十瓶山窯産の須恵器壺の完形品は現存するものが少なく，同時期の亀山焼との比較研究を進めるうえでも極めて貴重な資料となるものです。

岡山県立博物館だより　No.42
発　行　日　平成６年３月31日
発　行　者　岡山県立博物館
　館長　橋本泰夫
　岡山市後楽園1－5
　☎(086)272－1149